

◆プログラム担当より

竹村治雄

プログラム委員長（大阪大学）

清川 清

プログラム副委員長（大阪大学）

本大会には、口頭発表177件、技術展示16件、作品展示7件、企業展示20件の申し込みがあった。プログラム担当は、主に講演発表の受付とプログラム編成、座長の選出と依頼を担当した。最終的には、177件の口頭発表を、35のセッションに構成し、最大4パラレルセッションとして実施した。講演トピックは学際的なVR分野を横断する幅広いものであり、学会の特徴がよく現れるものと成った。それぞれのセッションでの様子は、座長からの報告にゆだねることとし、プログラムに関する事項について以後報告する。

まずプログラム編成についてであるが、様々なプログラムとの兼ね合いでは、3日間の大会としてはこれがほぼ限界の講演数とも考えられる。したがって、今後は講演申し込み数がさらに増える場合は、講演時間の短縮あるいはセッションの並列度を上げるといった工夫が必要である。

次に、(株)ケー・ジー・ティーとクリスティ・デジタル・システムズの協力を得て、「3Dセッション」として立体プロジェクタを用いた発表を行えるセッションを初日に実施した。アナウンスが講演締め切り後となり、実際に立体プロジェクタを用いた発表は6件に留まったが、効果的に利用している発表が多く、今後盛んになると思わ



3Dセッションの様子

れる。ぜひ、来年度以降も継続を検討していただきたい。

そのほか、本年の大会の特徴的なことは、論文集をCD-ROM化したことと、発表申し込み締め切りを大会の10週間前、原稿の締め切りを大会の6週間前と例年より遅くしたことである。前者は、増え続ける発表件数のために論文集のページ数が増大し、会議期間中に持ち歩くことが困難となってきたことへの対応でもあるが、同時に電子化のメリットを生かした全文検索やカラーページへの対応も考慮して、実行委員会として実施したものである。大会はパラレルセッションであり、聴講する講演会場を選択するための一助としてアブストラクト集を添付し、参加者の便を図った。後者の申し込みスケジュールの期間短縮は、できる限り最新の研究成果を発表する場として、大会を大いに盛り上げることができるとの反面、論文集の編集時間が限られ、担当委員にはいろいろご迷惑をかける結果となった。この点については、今後の検討が必要であるが、編集を工夫することで改善が図られると考えられる。

◆企業展示担当より

柳田康幸

企業展示担当（ATR）

今村伊知郎

企業展示担当（ソリッドレイ研究所）

昨年まで「機器展示」と呼ばれていたカテゴリーであるが、今大会は位置付けをより明確にするため「企業展示」に名称が統一された。

大会実行委員会結成当初、大会長の美濃先生から「過去、出展社でもある企業の方に任せきりのことがあったが、今大会は大学・研究機関側で全体をしっかり把握してやって欲しい」とご指導いただいた。しかし、やはり展示の実務を知り尽くした人が必要不可欠であり、結局、研究機関サイドの柳田、企業サイドの今村を中心にチームを進めることになった。連絡先の分散による混乱も心配されたが、大学・研究機関側と企業側のノウハウを融合して準備を進めることができた。

企業展示は本大会におけるスポンサー的な意味合いも強く、出展社数は大会の会計に大きく影響する。昨年の岐阜大会では15社出展とのことで、今大会の目標は昨



企業展示会場の様子

年実績以上、努力目標は20社に設定された。申込受付開始直後の出足は遅く、目標を達成できるかどうかかなり危ぶまれたが、大会長・美濃先生、幹事・横小路先生が産業用バーチャルリアリティ展 (IVR 2004) にて出展企業に声をかけていただいたことや、実行委員の先生方のご協力による活発な勧誘活動が功を奏し、最終的には20社の努力目標を達成した。大会の会計にも貢献できたのではないかと思います。

展示内容はディスプレイ、センシングシステム、ロボティクス、ソフトウェアなど多岐にわたり、大会参加者の方々には最新のVR関連製品を堪能していただけたと思う。口頭発表の一部会場が別建物になっていたため来場者数が気がかりであったが、展示会場はほぼ常時賑わっていた。ご出展いただいた企業の方々にとっても、出展してよかったと思っていただけたことを願うばかりである。

今大会の展示を行うにあたり、京都大学コンベンションセンターの鈴木様、京都大学時計台事務局の榎本様には大変お世話になった。この場を借りて感謝したい。

◆作品・技術展示担当より

木村朝子

作品・技術展示担当 (立命館大学)

本年度の作品・技術展示は、京都大学の時計台百周年記念会館2階ホール、会議室2部屋(暗室)、廊下で行われた。歴史ある建物や家具、インテリアの中に、先端技術を利用した沢山の展示が並んだ。作品・技術展示の発

表件数は年々増加傾向にあるが、本大会から作品・技術展示の優秀作品に学術奨励賞が贈られることとなり、作品展示7件、技術展示16件の大盛況となった。

紙面の都合上、一部の展示を簡単にご紹介したい。作品展示では、カラフルな蛇口を捻ると水とともに「おとだま」が水溜りに浮かび、柄杓ですくったり混ぜたりすると、おとだまがぶつかりあい和音を奏するという楽しい作品、禅・俳句など日本の伝統的文化を体験できる作品などが展示された。

技術展示では、16件中5件の触覚ディスプレイと2件の臭覚ディスプレイの展示があり、全体のほぼ半数を占めた。触覚ディスプレイでは、振動子によるザラザラ感の提示法や、ピンアレイ制御による3次元形状ディスプレイなどが展示された。また、高解像度のLCDとレンズアレイを用いた裸眼立体ディスプレイや円筒型の裸眼立体ディスプレイ「SeeLINDER」といった立体ディスプレイも展示された。複合現実感技術の展示には、実物の昆虫図鑑からCGの昆虫があらわれ、手で持って眺めることができるMR昆虫図鑑やMR観桜会があった。レゴのようなセンサブロックで3次元形状を組み立て、



作品・技術展示の様子